第七章　国語の教育

（一）　幼児期の国語教育

■幼児の能力

一歳半までは、「ウンマ」とか「マンマ」とか、僅か数十の“カタコト”しか言へなかった幼児が、それから二年位の間に、立派な内容のある、文法的にもしっかりとした日本語が話せるやうになる。

日本語には、テニヲハや動詞・形容詞の活用といふ、日本語を学習する外国人にとっては大変学習しにくく使ひにくい文法上のきまりがある。日本語を何年間も学習し

たといふのに、「私、行くません」とか、「私、行くないよ」といふやうな、テニヲハも使へなければ、活用も正しく使ひ分け出来ない外国人が多いことは、淮もがよく知ってゐる所である。

ところが、幼児は、三歳ともなれば、テニヲハを正しく使ひ、活用も正しく使ふことが出来るやうになる。「僕、行くないよ」などと言ふやうな幼児はほとんど見ることが出来ない。

然し、それは決して教へられてさうなるわけではない。「ここでは未然形を使ひ、ここでは連用形を使ふのだよ」などと教へる親はゐるはずもない。それなのに、一歳半までは「ウンマ」「マンマ」としか言へなかった幼児が、それから二年経つか経たないといふのに、未然形を使ふべき所ではちゃんと未然形を使ひ、連用形を使ふべき所では連用形が使へるやうになるのである。実に驚くべき能力である。

私の孫は、三歳になった頃、“ピンクい”といふ言葉を使ひ始めた。これは誰が教へたものでもない。また、誰もこのやうな言葉を使ってゐる者が周囲にゐたわけでもないのに、“ピンクい”といふ言葉を使ひ出したのである。だから、自分で作り出した言葉だと言ふことが出来る。

私は、この事実から、幼児は周囲で語られる言葉を耳にして、それを単に吸収してゐるだけではないことを悟った。「赤→赤い。白→白い」といふやうな言葉が頭の中に入れば、それらの事実から、「色の名前＋“い”といふ造語の法則が頭の中に自然と作られ、また、その法則が自然と適用され、“ピンクい”といふ言葉になって口から出て来るのであらう、といふやうに考へた。

どうも幼児といふものは、言葉を使ひ始めて二年と経たぬうちに、雑然と吸収し覚えた言葉が、自然と帰納的に整理されて、そこから法則が作り出され、同時に、その

法則が適用され使へるやうになるものと思はれる。もしもさうでなかったなら、動詞や形容詞の活用が誤りなく使はれるやうになるわけが無いではないか。

このやうな頭の働きは、幼児には誰でもひとりでに働くものであるが、幼児期を過ぎると、途端に、急速に衰へて行くもののやうである。だから、外国語の学習でも、幼い者ほど上達が早いのである。大人の外国人が、テニヲハや活用を正しく使ひこなすことが出来ないのは、彼らが幼児期を過ぎてすでに年久しいからだと考へられる。

幼児期には、誰でもこのやうな素晴しい能力があって、それが素晴しい働きをしてゐるのであるが、然し、それは、幼児の頭の中に「赤·赤い。白·白い。……」といふやうな言葉が豊富に収められてゐて、それで初めて、「ピンク→ピンクい」といふ思考が働くのであって、何も入ってゐない頭では、思考は決して働かない。働かせやうが無いのである。私たちはこの事をよく知って置く必要があると思ふ。

幼児の頭の中で自然と働く帰納的思考や演繹的思考といふものは、思考の材料である言葉が豊富に頭の中に貯へられてゐて初めて自然に働く作用であって、言葉が無くては頭は働きやうが無い。だから、幼児期の国語教育の基本は、「幼児に対する豊富な言葉の語りかけ」の一言に尽きると言へよう。

さうすれば、幼児はその言葉をひとりでに吸収し、吸収された言葉は自然と整理され、そこから法則が作られ、語法が身について、正しい日本語が自由自在に使へるやうになるのである。

■待って教へる

次の話はある幼稚園で実際にあった話である。先生が黒板に“悪魔”といふ漢字を書

いて、「この字が読める人？」と尋ねたところ、誰も答へる子がゐなかったので、「では、この字が何と読む字か、教へてあげませう」と言った。すると、子供たちは「先生、待って。私(僕)たちに考へさせて！」と言ったのである。

先生はその時、「馬鹿な事を言ふものだ。読めない字をいくら考へたって読めるやうになるわけが無いのに……」と思ったさうであるが、子供たちの言ふままに待つことにした。すると、子供たちは早速、話し合ひを始め、「下の方の字には“鬼”といふ字があるよ。だから、きっと鬼の仲間だよ」といふ意見から、到頭「アクマではないか」といふ結論に達し、「先生、その字はアクマといふ字ではありませんか」と言った、といふ事である。

幼児にはかういふ能力があり、幼児はこの能力を働かせたがってゐるのである。だからこそ、難しいはずのテニヲハや活用が、僅か二年ほどの間に正しく使ひこなせるやうになるのである。

だから、幼児にテニヲハの使ひ方や活用の変化の仕方を教へてやる必要が無いのである。いや、必要が無いといふよりも、教へてやってはいけないのである。なぜなら、教へてやったら、幼児は自分で頭を働かせる必要が無くなるので、頭が働かなくなり、従って、頭の働きが発達しないと思はれるからである。

脚を使へば脚が丈夫になるやうに、頭を使へば頭の働きが良くなる。その反対に、脚を使はないでゐると脚が弱くなるやうに、頭も使はないでゐると頭の働きが弱くなる。だから、子供が考へれば解るやうな事については、決して教へてやらないのが良いのである。

今の教育は、知識を重視してゐて、知識を子供の頭に豊富に詰込んでやることが主な教育である、と思ってゐる節がある。だから、何でもかんでも教へてやるばかりで、

子供が疑問を懐くのを待つ、といふ事の大切さを知らない。

幼児期ほど、物事を深く、広く考へ、疑問を抱く時期は他に無い。だから、親の手に負へない程よく質問をするのである。幼児期の幼児には、誰でも皆このやうな本性があるので、教育の仕方によっては実に進歩が目覚しいのである。

ところが、子供が疑問を感ずる前に、何でもかんでも教へてやる親が多い。然し、こんな事ばかりしてゐると、次第に疑問を感ずる本性が働かなくなり、当然疑問を感じなければをかしいやうな事柄についても、全く疑問を感じない人間になってしまふ。それは、「脚を使はないでゐれば、脚が自然に弱くなる」といふ原理と同じものである。

だから、教へてやりたくても教へてやらないでゐて、子供が疑問を感じてそれを「質問して来るまで待つ」といふことが大切なのである。同じ説明でも、自分がした質問に対する説明には、食ひ入るやうな表情で聴くことは、読者もよく御経験のことと思ふ。この真剣に聴く態度が、その説明の内容を確実に把握させると同時に、疑問を解決した時の喜びの体験が子供の向学心に何よりも役立つのである。

■自然に育つ自然の力

筑波科学万博で大変な話題になったものの一つに「一万個の実を成らせたトマト」があった。あのトマトはごくありふれた苗を栽培したものであって、トマトの種や苗は、すべて本来あれだけの能力を内に秘めてゐることを私たちに教へてくれたものであった。

最初の成長の段階で、一万個の実を育てることが出来るだけの肥料を吸収できる根と、次いで、その栄養を作り出すのに十分なだけの葉が用意されさへすれば、あとは、

光と肥料を含んだ水が与へられれば、ひとりでに、一万個とは行かないまでも、数千個の実を成らせることは、誰にでも出来ることを私たちに教へてくれた。

ただ、今まで、それだけの根と葉とを準備する方法を知らなかったために、千はおろか百個の実さへ成らせることが出来なかった。それで、人々は、一万個の実を成らせたトマトを実際に見るまでは、「トマトは数十個の実が成ればそれで十分である」と思ってゐたのである。

この事は、人間の場合にも当てはまる。近年大脳生理学の発達により、人間の大脳には百四十億個もの神経細胞があることが解った。然し、どんなによく頭を使ってゐる人でも、その十分の一も使ってゐないのではないか、といふ事が言はれてゐる。

一万個のトマトを成らせるためには、成長の最初の段階で根と葉とを可能な限り成長させることが絶対に必要であるが、それと全く同じことが人間の成長にも言へるのである。

人間の大脳の神経細胞は、生れた時に百四十億個の細胞が用意され、これは減ることがあってもふえることは無い。大脳の働きは、神経細胞から出る樹状突起が他の細胞と連絡し、その密接な連絡網によって行はれるが、生れたばかりの時にはこれがほとんど作られてゐなくて、生れてから二十歳位までの間に完成されるのである。

この樹状突起による連絡網が最も発達する時期は生後の三年間であり、それは外界から受ける刺激によって発達するものであることが判って来た。その刺激の中で最も有効なものが“言葉”であることも判って来た。だから、生後の三年間における幼児への“言葉”の語りかけが、その子のその後の一生を左右する、といふことが出来るのである。

大脳のネットワーク、神経細胞の樹状突起による連絡網は、例のトマトに例へるなら、

“根”である。根は、その成長の初期に完成して、あとがらではいくら肥料を与へても決して成長しないやうに、大脳のネットワークも人生の初期にほぼ完成してしまっていることが今は明瞭に判ってゐるのである。

トマトに一万個の実を成らせるためには、それだけの実を成らせるのに必要な肥料を吸収する根が用意されなければ絶対に不可能であるやうに、偉大な知能を有った人間に成るためには、大脳のネットワークを立派なものに作り上げておく必要がある。

だから、教育は「生後三年間の教育」が最も重要であって、これがうまく行けば、あとの学校教育はひとりでにうまく行くが、生後三年間の教育がうまく行かなかったら、あとの学校教育をどんなに頑張ったとしても飛躍的な結果を望むことは難しい。昔の人はこの事を見事に「三つ子の魂、百までも」といふ言葉で表現してゐる。

私たちは、「一万個の実を成らせるトマトになるか、百個の実を成らせるトマトになるかは、苗の段階でその根によってほぼ決定しまってゐるやうに、人間が偉大な人物になるか、小人になるかは、幼児の段階でその脳のネットワークの規模によって大きく左右される」といふことをよく知って置く必要があると思ふ。

一万個のトマトを成らせるだけの根が用意されてゐれば、一万個のトマトが自然に成るが、百個のトマトを成らせるだけの根しか用意されてゐなければ、どんなに肥料を与へても百個以上の実を成らせることが出来ないやうに、幼児期の間に立派な大脳のネットワークが作られてゐれば、あとは自然と立派に頭が働く偉大な人間になれるけれども、幼児期にそれが出来てゐないと、その後の学校教育が立派であらうと、そう大きな効果は期待出来にくい。

■伸び伸びといふこと

この頃、“詰込み教育”の反動で、しきりに「伸び伸びとした教育」といふ言葉が口にされる。然し、それは、生後の三年間の教育が立派に行はれた上の事でなければならないと思ふ。

生後の三年間、十分な“言葉の教育”が行はれてゐれば、あとは放って置いても、子供は自分の能力を“伸び伸び”と発揮して、一廉（ひとかど）の人物になれることは疑ひない。

然し、初めから放ったらかしの“伸び伸び”では、狼少女カマラほどではないまでも、禽獣に近い人間になってしまふ恐れがある。人間だけが育ての親によって立派にもなり低劣にもなる動物だからである。

ライオンの赤ちゃんは、羊が育てても人間が育ててもライオンになり、その本性を変へることが出来ない。羊の子をライオンが育てたとしても決してライオンにはならない。然し、狼に育てられた少女カマラは、人間よりも狼に近い人間になってしまったのである。

カマラを育てたシング牧師の記録によれば、四ん這ひで走り回り、食べ物を食べる時にも手を使はず、口で直接食ひついたと言ふ。昼は部屋の隅にうづくまって眠り、夜になると四ん這ひになって歩き回り、時々、狼の遠吠えをしたと言ふ。正に人間狼である。

このやうに、他の動物では育ての親が何であらうとも、その本性が歪められることなくライオンはライオンに、羊は羊に育つけれども、人間だけは、育ての親の影響を受けて、立派な人間にもなれるが、狼にもなってしまふのである。つまり、人間だけが“教育”を必要とする唯一の動物であり、その“教育”を最も必要とする時期は「生後

の三年間」であることが解る。

人間の赤ちゃんほど無力な者は無い。親が四六時中保護してやらなければ決して育たない。「生後の三年間」は親の保護が是非とも必要なのである。その三年間に、大脳の神経細胞のネットワークの大半が形成されるのである。だから、生後の三年間といふのは、肉体的にも精神的にも一生のうちで最も大事な時期である、といふことが出来ると思ふ。

高等動物ほど親の保護を必要とし、その期間が長い。高等動物ほど生む子の数が少ないから、親の保護が無ければ種族が絶える恐れがあるからである。魚などは卵を生み放しにして顧みないが、その代り、一度に何千何万となく生む。卵から孵(かへ)った稚魚は、親の保護を受けずに自分の力で生きて行かなければならないが、成魚になれるのは何千何万のうち唯々二匹だけなのである。

今や、文明社会においては、一組の夫婦は二人の子供しか生まない。二人の子供を生んで二人とも成人に育て上げるだけの自信があるからである。然しながら、“育てる”とは肉体の事だけであってはならない。「人間としての心」“精神”を養ふことが無ければならないのである。

その基礎は、生後の三年間に、母親によって作られるべきだと私は思ふものである。人間の子供ほど無力なものはないけれども、それだからこそ愛情のある親の保護が必要なわけであり、親子の強い絆が生れるわけであって、この生後の三年間は“天与の賜物”だと私は思ってゐる。その“天与の賜物”を受ける第一の有資格者は、妊娠から分娩に至るまでの大事を担当した母親である。

ところが、この頃の母親の中には、これを“天与の賜物”と思ふどころか、厄介な仕事と思ってゐる者が少なからずゐるのは、一体どうした事であらうか。私は不思議に思

ふと同時に寒心に耐へない。

■“我が子”は“我”である

「年々歳々、花あひ似たり。歳々年々、人同じからず」と言って、昔の詩人は人の世を嘆いたが、それは、草木の一世代である“年”を単位にして人の世を見たからである。“人の世”は、“世”といふ文字が示してゐるやうに“十”といふ文字が三つ重ねられた文字であって、“三十年”を意味した文字である。人間は、三十年経つと、現在の自分の親の年齢に達することで、“三十年”が、人間の“一世代”であることが解るであらう。

ここに、七十歳前後の老夫婦が住む家があったとしよう。その息子夫婦は大よそ四十歳前後であり、十歳前後の子供を有つ親であるのが普通である。それから、三十年後にはその家はどうなってゐるであらうか。十歳だった子供は四十歳になり、三十年前の自分とそっくりの十歳前後の子供の親になってゐるはずである。そして、四十歳前後だった息子夫婦は七十歳になり、三十年前の両親とそっくりの風貌の老夫婦になってゐるはずである。

このやうに、「歳々年々人同じからず」と見える人間も、“三十年”といふ単位で見ると、「人あひ似たり」であって、少しも嘆くには当らないのである。草木は、春が来れば新芽を出し、若葉となり、花を咲かせるが、秋になればすっかり枯れ落ち、冬は蕭条（せうでう）たる有様になる。然し、間もなく春が巡り来って「年々歳々、花あひ似たり」といふ事になるのである。それと同じやうに、人間も三十年といふ単位で、草木の一年に当ることを繰返してゐるのである。

花は咲き、花は散っても、次の年には、その花が結んだ実から新しい芽を出して、ま

た花を咲かせるやうに、人間も、自分の世を精一杯生きてこの世を去って行くのであるが、新しい生命をこの世に残し、その新しい生命により一層充実した人生を期待するのである。昨年の花と今年の花とは、生命としては一つにつながってゐるやうに、“我”と“我が子”とは一つにつながった生命体である。

“我が子”は“我”の生命の延長であり、“我”の“より良き我”である。だから、“精神”を有たぬ禽獣でさへ、“我が子”が危険にさらされれば、“我が身”を捨ててもこれを救はうとするわけである。人間の親としては「自我の実現」である子育てを厄介視するやうでは、「禽獣にも劣る者」と、大いに責められて良い。

■子育ては親の権利

子育ては親の責任であるが、同時に“権利”でもある、と私は思ふ。子供を立派に育て上げることは、大発明や大発見に勝るとも決して劣らない、「人類に対する貢献」であると思ふからである。立派な発明や発見は、確かに私たちの生活を向上させるのに役立つことであらうが、私たち“人間”そのものを向上させるものではない。然し、立派に子供を育て上げることは、“人間”そのものを向上させることであるから、その価値は一層高いものである、と私は思ふわけである。

だから、“子育て”といふ仕事に従事できることは、人間として実に有難い仕事を与へられたわけであり、感謝すべき事だと私は思ふ。それで、私は、「子育ては“天与の賜物”であり、親の特権である」と言ふわけである。然し、権利の第一は母親に在って、

父親の権利はその次である。とは言へ、時により場合によっては、父親も、カール・ヴィッテのやうに、母親以上に主導権を取って子育てに当ることもあって良い、と思ってゐる。かのペスタロッチも、「カール・ヴィッテが息子のカールを立派に育て上げたことは、人類に対する大きな貢献であった」として、これを高く評価してゐるが、私も同感である。

子育ては決して楽な仕事ではないが、それだからこそ楽しいのではないか。人間は、楽な事ばかりしてゐたのでは、決して楽しく感じられないやうに生れついてゐるらしい。その事は、「汗水流して働いた時に飲む一杯の水の味は、怠けてゐて飲み食ひする、どんなに贅沢な飲み物や食べ物の味に勝る」といふ事でよく解る。それに、人間は「自分の成功よりも子供の成功の方が嬉しく感じられる」やうに作られてゐるらしい。子育てを厄介視するとは考へ違ひも甚しい。

■生後三年間の教育

生後の三年間の子育ての中で、最も大事な事は「幼児への豊富な語りかけ」だと思ふ。『聖書』によれば「言葉は神なりき」である。だから、言葉によって作られる心の働きを“精神”と言ふのである。人間が人間であるのはその“精神”のためであって、その肉体にないことは、狼に育てられた少女カマラの例でよく解ると思ふ。

カール・ヴィッテは牧師であったから、言葉の教育の重要性を特によく知ってゐたのであらう。生れた翌日から、息子のカールに言葉の教育を始めたのである。それで、普通の子供の十倍もの言葉を覚え、これを使ふことによってあの偉大な人生を開拓して行くことが出来たのである。

幼児期の幼児は、周囲に在るものが良いものであらうと悪いものであらうと、おか

まひなくすべて吸収して、それで自己を形成して行くのであるから、この時期には、頻繁な言葉の語りかけが必要だと言っても、その言葉を選択することが極めて大切である。

言葉は、人間の心を形成し、かつ、これを養ひ育てるものであるから、出来る限り、優しく美しい言葉や、正しく力強い言葉を選んで使ふことに努め、醜悪な言葉や下品な言葉は幼児の耳に入れないやうに、極力注意する必要があると思ふ。

これは、少なくとも幼児期の三年間、その努力を継続すべきであって、さも無ければ効果は薄いであらう。その代り、三年間継続して実践できたら、あとは仮に放って置いたとしても、本人の精神がもう立派に出来上ってゐるのであるから大丈夫である。俗に言はれてゐるやうに、「三つ子の魂、百までも」だからである。

日本人は「熱し易く、冷め易い」と、よく言はれるけれども、子供の教育はこれであってはならない。教育は“継続”して実践することが何よりも大切である。その事を可能にするものは、唯々わが子に対する強い愛情と、それによって支へられる忍耐力とである。教育には知識やテクニックなどニの次である。「石の上にも三年」と言はれる。わが子のため、三年間だけは是非とも辛抱して実践してほしいと思ふ。

■言葉は漢字と一緒に

私が「漢字教育は幼稚園から」といふ事を提唱してもう二十年になるが、その間、指導に当る先生方に特に注意してもらった事は、“漢字を”教へるのではなくて、“漢字で”教へることである」といふ事であった。それは、先生方が口で子供たちの耳に訴へる言葉の中で、この言葉だけは子供たちの頭の中に刻んで置いてもらひたいと思ふ言葉

を漢字で示し、子供たちの目に訴へることである。

その“漢字”を教へてやる必要は全く無い。幼児は教へてもらはなくても、「あの字はどうも〇〇〇といふ字らしい」と思ふものであり、さう思へばそれだけで漢字が覚えられてしまふものである。だから、「漢字を教へる必要は無い」と言ふのである。そして、かういふ教育法を、「“漢字で”教へる」教育法と言ふのである。

漢字は「目で見る言葉」である。「百聞は一見に如かず」の諺通り、目の働きは耳の働きよりもずっと強力であるから、漢字は言葉よりも覚え易く、頭の中に残り易いのである。その理由は、言葉は発するや否や消えてしまふけれども、漢字は覚えるまで消えずに待ってゐてくれるからである。だから、ヴィッテは言葉を語りかけただけであったが、言葉を漢字に表してこれを見せながら語りかけたらもっと素晴しい結果が現れることを確信する。

実は、これを家庭で、自分の子に実践したお母さんがゐる。『天才児を創る』の著者、三石由起子さんである。三石さんは私の『漢字による才能開発法』(講談社)も『石井式漢字教育法』(グリーン・アロー出版社)も読んだ方であるが、「私は半信半疑で、三歳だった娘と二歳だった息子に教へました」と言ひながら、その一年後には、「私の息子は、三歳で漢字混りの日記が書けるやうになりました」と書いてゐらっしゃる。

その教へ方は、先に述べた「言葉を、出来るだけ漢字で書いてこれを見せながら話す」といふ方法である。この方法は、私が二十年来幼稚園の先生方に言ひ続けて来てゐる事であるが、漢字教育に熱心な先生でもなかなかここまでは行ってくれないものである。それを三石さんは家庭でこれを二人のお子さんに実践されたのであるから、私は実に嬉しかった。

三石さんは「子供とは『漢字でしゃべる』――会話に出てくる漢字(実は言葉のこと)は

その場で書いて見せる」といふ見出しの項で次のやうに書いてゐらっしゃる。

「漢字カードはあらゆる機会をとらへて作るやうにした方がよいと思ひます。私の場合はかうでした。『お父さんは？』と子供が訊いたら、『まだ、会社よ』と書って“会社”と書きます。三〇分もたって、『まだ会社？』と子供が訊いた時には、『さう、会社』と言って“会社”ともう一度書きます。言ふまでもなく大きな字で、です」

「子供が何か話しかけてくる時、私はそれに対して答へながら、さり気なく黒のマジックインキで、ワラ半紙に漢字を書きつけていきます」と。

これを実践すれば、幼児期の三年間に、小・中学校の九年間に学習する漢字の大半は覚えて読めるやうになることは間違ひないのであるが、いくら私がさう言ってもそれが信じられないらしく実践してくれる人が今までゐなかった。それを三石さんが実践してくれたのである。

三石さんだって、最初は「半信半疑で教へました」とある。半信半疑でも実践すれば必ず解るのであるから、「効果が無くて元々。騙されたつもりでやって見よう」といふ気持が必要だな、と私はつくづく思った。漢字学習では誰も苦しんだ経験を有つものだから、幼児に覚えられるわけが無い、と思ひ込んでゐる。だから、信じられるわけが無い。半信半疑になれば立派なものである。問題はその時、それを実践して見るかどうかである。

食べ物の味は食べてみれば直に判るが、食べてみない限り、いくら考へてみても決して判るものではない。ところが、見た目が悪いと、たいてい食べてみようとしない。“食はず嫌ひ”が多いのである。幼児期の漢字教育が二十年経ってもこの程度にしかならない

のは、試してみれば直に判るのに、試してみようともしない“食はず嫌ひ”の態度に原因があるのである。

三石さんの体験談『天才児を創る』が、世のお母さん方の「ほんとか嘘か、私もやってみようか知ら」といふ気持を起させてくれることを期待し、祈るものである。

■重度の精薄児も漢字は覚える

私は、言葉が覚えられない程の重度の精薄児を指導することにより、「言葉よりも漢字の方が覚え易い」といふ事を発見した。“花”といふ漢字カードを本物の花と一緒に見せて、「これは“はな”だよ。こっちは“はな”といふ字」と言って毎日毎日繰返して教へるのだが、なかなか“はな”といふ言葉を覚えてくれないのである。

然し、毎日、このやうにしていろいろな漢字カードを実物と一緒に提示して繰返し教へてやってゐたところ、漢字カードと、それに当る実物とを照応させることが出来ることに気が付き、漢字カードを子供に渡してそれに当る物に照応させることをさせて見た。すると、目を輝かせて照応させるのである。それが正しく照応できるのである。それで讃めてやると実に満足気に笑ふ。私もこれだと思って毎日これを続けた。

そんな事をしてゐる中で、漢字カードを読むやうになったのである。“花”を“はな”、“窓”を“まど”、“黒板”を“こくばん”と言へるやうになったのである。重度の精薄児にとっては、“はな”といふ簡単な言葉でも“は”“な”と続いて発声される音声を聴き取ることは大変難しい事なのである。また、聴いた音声をその通りに発音することは、それ以上に難しい事なのである。それに比べて、漢字は音声のやうに消えてしまふことが無い。頭の中に納まるまで待ってゐてくれる。だから、覚えられるのである。それで、

“花”といふ漢字カードと実物の花とを照応させることが出来るのである。

この事実から判断すれば、「漢字を識別するといふ事は、重度の精薄児にとっても、決して難しい事ではない」といふ事が判る。ところで、頭は使へば必ずその働きが向上するものであるから、漢字カードと実物とを照合させるといふ作業を毎日反復してゐれば、頭の働きは日毎に向上して行くはずである。それで、言葉が覚えられて“はな”と言へるやうになったものに違ひない。

私はさう判断を下したのであるが、実はそれには、それ以前に次のやうな出来事があって、それで「漢字は言葉よりも覚え易いのではないか」といふやうな予想があっての上の事であった。

■漢字は言葉よりも覚え易い

今から十七年前の事である。講談社から刊行した『漢字による才能開発(副題・三歳からの漢字教育)』の読者だといふ方から、相談の電話を受けた。「お子様の年齢は？」と尋ねると、「一歳半です」と言ふ返事である。「それはまだ早過ぎますよ。タイトルの通り三歳からで十分です」と言ふと、「でも、もうやってゐるんです。それでもう三百字ほど読めるんです」といふ返事が返って来たので私は思はずうなった。

その頃、保育園で、「二歳児と三歳児とに、同じ教材を使って同じやうに教へてゐるが、二歳児の方がよく覚える」といふ報告が、やっと初めて届いたばかりで、それなら、「三歳から……」を「二歳から……」に改めなければいけないかな、とやっと思ひ始めてゐた頃の事であったから、「一歳半で三百字の漢字が読める」といふこの話には、私も全

く驚かされてしまったものである。

その話を、たまたま私の所に取材に来た朝日新聞の記者にすると、「それはぜひ伺ひたい」といふ事になり、朝日新聞の全国版に、写真入りで「一歳半の坊や、三百の漢字を読む」といふ大見出しで、私の感想も交へて報道されたことであった。この坊やが、『石井式漢字教育革命』(グリーソ・アロー出版社)で、「零歳児でも漢字が覚えられる」といふ事の実例として挙げられた“田中庸介”くんである。(この時一歳半だった庸介くんも、今は十八歳、立派な東大の学生になられた)

私もこの時、記者と一緒に訪問して、庸介くんに会ったのであるが、一歳半で三百字の漢字が読めるといふだけあって、目の輝く、いかにも賢さうな幼児であった。お母さんの話によれば、生後八か月ばかりの頃、庸介くんが泣いてむづかったので、家の中をあやしながら歩き回ったさうである。その時、なかなか泣き止まなかった庸介くんが泣き止んで、何やらじっと見詰めてゐる様子。その視線をたどると、それは神棚に下ってゐる「命名・田中庸介」と書かれた半紙だったのである。

それと気が付いたお母さんは、「あこれは庸ちゃんの名前よ。田中庸介、田中庸介……」と、繰返し読んでやったさうである。それからは、庸介くんが泣いてむづかった時にはいつも神棚の下に行き、「田中庸介」といふ文字を指さして読んでやったさうであるが、不思議とそれで御機嫌が直ったといふことである。

さうしてゐるうちに、ふと、「漢字なら何でも良いのではないだらうか」と考へるやうになり、「漢字による才能開発」の記事を頼りに“漢字カード”を作り、試みに庸介くんにそれを見せながら読んでやると、漢字そのものがお気に入りらしく、関心を示すことが解ったので、この方法を続けること八か月、その間に漢字カードを三百枚も覚えた、といふことであった。

私は、庸介くんに会ふまでは、「零歳児に漢字が覚えられる」とは夢にも考へた事は無かった。然し、庸介くんに会ひ、その実際を目のあたりに見、お母さんのお話を伺ふと、「人間といふ者は、生れ落ちた時から、言葉に関心を有つのと同じやうに、漢字にも関心を有つやうに作られてゐるのではないか」と思ふやうになったものである。

それに、幼児は、一般に、「一歳半では三十〜四十語の言葉を覚える」といふのが標準である。さうすると、「漢字は言葉よりもずっと覚え易い」といふ事になる。それも、三百対三十〜四十」といふのであるから、大変な違ひである。庸介くんが神童であったにせよ、漢字が言葉よりも覚え易いことは疑ふ余地が無い。私はさう確信するやうになったのである。

そこで考へるやうになった事は、「漢字はなぜ言葉よりも覚え易いのであらうか」といふ問題である。私はそれまで長いこと、「言葉と漢字との違ひは、それが耳から入るか、目から入るかといふ違ひだけであって、納まる所は同じ大脳であるから、難易の差は本質的には無いのではあるまいか」位に漠然と考へてゐた。然し、これで、「耳から入るか、目から入るか」には大変な差があるのだといふことを、強く感じさせられたのである。

そこで、先づ第一に考へられた事は、「耳で問く“言葉”は、発せられた瞬間に受取らなければならない」といふ難しい条件を必要としてゐる事である。それは、受取る側に受取る構へが出来てゐなければならないばかりでなく、その際に少しの取りこぼしも許されないのである。なぜなら、言葉といふものは、時間的にある間隔を置いて次々に発せられては消えて行くいくつもの音声の集合体であるから、初めから終りまで、全体を洩れなく受取らなければ、これをまとめて判断することが出来ない。

それに反して、漢字は一瞬のうちに受取ることが出来、かつ判断できる“まとまり”

ある一つの図形であって、それも、頭の中に完全に納まるまで絶対に消えることなく、待ってゐてくれるものである。このやうにつぶさに比較してみれば、「漢字の方が言葉よりもずっと覚え易い」といふ事がいやでも解って来たのである。

■幼児は皆漢字が大好き

先日、栃木市に在る「さくら保育園」(荒川銀子園長)で公開保育が行はれ、私は記念講演に行ったついでに零歳児教室を主に見学した。入園してすでに七か月を経過してゐたので、ほとんどの子が一歳児になってゐて、よちよちと歩き回ってゐた。

こんな幼児たちが、自分の名前を書いた漢字カードを、たくさんの漢字カードの中からちゃんと見付け出すことが出来るのである。友だちの名前のカードと一緒になって床の上にばら撒かれてゐるたくさんのカードの中から、自分の名前のカードを見付け出さうと、真剣に見詰める幼児たちの姿には、見学者たちは皆、斉しく感動させられてゐたやうだった。自分の名前をまだ声に出して言ふことは出来ないけれども、自分の名前を書いたカードはさうでないカードと見分けがちゃんと付くのである。漢字の見分けが付くのである。

これは、毎朝、子供の名前を書いたカードを見せながら、その子の名を呼んでやってゐるその結果なのである。かういふ事を毎日続けてやってゐれば、子供は自然と自分の名前を表した漢字を覚え、自分のものと他のものとの区別が立派につくやうになるのである。

このやうに、零歳児から漢字を使って行ふ保育は、今、次第に広まりつゝある。公開保育も、すでに九州福岡市の「屋形原保育園」(木原フミエ園長)、「御幸保育園」(加藤

政喜園長)、茨城県岩井市の「あかつき保育園」(佐藤千枝子園長)などが行ってゐて、私はそのいづれも訪問してこの目で直接観てゐるが、誰も見学して感嘆し、感激するのは、零歳見教室の子供たちの漢字カードに対する反応の強いことである。

赤ちゃんは、生後八か月頃から、カタコトを言ひ始める。空腹になると、「ウンマ」とか「マンマ」といふやうなカタコトで母親に訴へることが出来るやうになるものである。このやうな時期になれば、赤ちゃんは“漢字カード”に興味を示し、そのカードを繰返し読んでやれば、その漢字を理解することが出来る、といふ事がよく判った。

例へば、“目”といふ漢字カードを見せて「め、め、め、……」と言ひ、続いて自分の目を指さして「め、め、め……」と言ひ、これを繰返してやるのである。そして、これを毎日、根気よく繰返してやれば、赤ちゃんも真似して、“目”といふ漢字カードを見れば、自分の目を指さすやうになるのである。

零歳児の赤ちゃんに漢字を教へてゐる前記保育園の保母さんたちが、口をそろへたやうに言ふ事は、「赤ちゃんは、泣いて機嫌が悪いやうな時でも、漢字カードを見せて読んでやると、たいてい機嫌を直してカードを見詰める」といふ事である。

私はこの事実から、赤ちゃんは「生れつき漢字が好きなのだ」と思ふ。漢字に興味を有つやうに生れついてゐるのに違ひない。言葉に関心を有つやうに生れついてゐるのと同じに、「目で見る言葉」の漢字にも関心を有つのだと思ふ。

あとでその理由を説明するけれども、「漢字は言葉よりも覚え易い」ものなのである。だから、カタコトが言へるやうになった赤ちゃんなら、誰でも漢字は容易に覚えることが出来るはずである。だから、生後八か月になったら、漢字カードを作って、漢字と一緒に言葉を掛けてやれば、言葉を覚えるより先に漢字を覚え、その漢字が手掛りで言葉が普通より早く覚えられるはずである。

大脳生理学の権威、故・時実利彦博士は、「生後の三年間が一生のうちで最も吸収力が旺盛で、記憶力が強い。三歳を過ぎれば、記憶力は年ごとに低下して行く」とおっしゃってゐた。それは、私の指導体験に照しても間違ひないことである。だから、漢字は小学校に入学するまでの間に覚えさせなければいけない事なのである。

■チンパンジーと言葉

チンパンジーは、人間に次いで知能の高い動物である。このチンパンジーに言葉を覚えさせようと努力した学者が、アメリカには多く輩出してゐる。

心理学者ウィンスロップ・ケロッグ博士は一九三一年、生後七か月半の雌のチンパンジーの赤ちゃんに、グアといふ名前を付け、生後十か月の息子ドナルドと、兄妹のやうにして一緒に育ててゐる。然し、全く同じやうに育てたのにも関はらず、ドナルドが言葉を覚えて話すやうになっても、グアは全く言葉を覚えず、この実験は一年ほどで終ってしまった。

それから十年ほど経って、ケロッグ夫妻と仲間の心理学者であったキース・ヘイズとキャシー・ヘイズが、ヴィッキーと名付けたチンパンジーを、やはり自分の子と一緒に育てた。ヘイズ夫妻は、四年間にわたって育て、その結果、「ヴィッキーは、“パパ・ママ・カップ”の三つの言葉を覚えて、それが言へるやうになった」と、報告してゐる。然し、“パパ”も“ママ”も、夫妻を意味する言葉として使はれたものではなく、“カップ”もカップそのものを指して言ってゐるとは断定できない節があったやうで、これを果して「言葉」と言へるかどうかには疑問があるとされてゐる。

また、この頃、チンパンジーに手話によるコミュニケーションを教へることを試みた学者

がゐた。ネバダ大学のベアトリック・ガードナー教授と、その夫のアレンである。最初の十か月に覚えた語彙は十語であったが、四歳頃までには八十五語に達し、これらを組合せた簡単な会話が出来るやうになった、と報告されてゐる。

一九八七年、ペンシルヴァニア大学のデイヴィッド・プリマック教授が、重度の障害児に教へるために開発した、プラスチック製の図形文字を、サラと名付けたチンパンジーに夫人のアンが教へて、これを学習させることに成功した。これについては、「アメリカン・サイエンス」誌に詳しく報告されてゐる。私は、一九七三年にアメリカに行った時、その記録映画を観る機会を得たが、「チンパンジーは漢字なら覚えられるのではないか」と思ひ、その実験が出来たらと思ったものである。

プリマック夫妻が使った図形文字は、特定の形と色をしたプラスチックの小片で、裏に磁石が着いてゐて、鉄製の黒板に吸ひ着くやうに作られたものである。六歳から十歳頃まで五年間に亙って学習した結果、数十の単語を覚え、これを英語の語法に従って並べて簡単な文章が作られるやうになった。例へば、夫妻が「リンゴとバナナのどちらがほしいか？」と文字を並べると、それを見て、「私はバナナがほしい」と文字を並べて答へることが出来るやうになったのである。

その後、アトランタのヤーキーズ研究所のデュアン・ランボー博士が、ラナと名づけられたチンパンジーに、タイプライターのキーを打つことによって、サラが学習したのと同じやうな視覚言語と言ふべき符号が掲示される学習機械を作り、これを操作して人間とのコミュニケーションに成功したことが報告されてゐる。

これらの実験を通して、チンパンジーは、聴覚言語は覚えることが出来ないけれども、視覚言語は覚えることが出来る、といふことが出来る。と言ふことは、「視覚言語の方が聴覚言語よりも覚え易い」といふ事であり、「漢字は言葉よりも覚え易い」といふ事

を示唆してゐると思ふ。

■障害児と言葉

私には『親こそ最良の教師』といふ著書がある。昭和五十五年十月、グリーン・アロー出版社から刊行したものである。この本の主人公の“愛子ちゃん”は、一歳半の時、ダンプカーにはねられて、頭蓋骨陥没といふ瀕死の重傷を負ひ、数日間、意識不明のまま生死の境をさまよひ、奇跡的に命を取り留めることが出来た子供である。

頭蓋骨陥没の後遺症のため、肉体的にも精神的にも重度の障害が残り、私が初めて会った時には、五歳五か月になってゐたけれども、“あ・い・こ”の三字を毎日、一年間に亙って学習させたのにも関はらず、一字も覚えられなかったこと、また、言葉を覚えて使ふ能力が極めて低いこと、などの事を知った。

それで、私は、一日に十五回、十秒間づつ一枚の漢字カードを教へることを奨めた。それは、例へば、“花”といふ漢字カードを、実際の花と一緒に提示し、「これは“花”ね。これは“はな”といふ字よ」と言って教へてやるのである。私の著書には、二年間に亙る記録が紹介してあるが、愛子ちゃんは二年間に三六七枚の漢字カードを学習し、その九〇パーセントを覚えて、正しく読めるやうになったのである。つまり、二年間に三三〇字の漢字を覚えたのである。

今、学校教育で、一・二年生の二年間に学習する漢字は二二一字（一年生は七六字、二年生は一四五字）であるから、愛子ちゃんはその一倍半もの漢字を覚えたことになる。重度の障害児でも、漢字はこれだけ覚えることが出来るのである。今の学校教育が、いかに間違った教育をしてゐるか、よく解るであらう。

然し、それよりも重要な事は、愛子ちゃんが漢字を覚えることにより、精神的に非常な成長をしたことである。情緒が安定し、独立心が芽生へ、二人がかりでも治療を受けるのが大変だったのに、独りで治療が受けられるやうになった事である。漢字が、このやうに人の心の働きを高める力を有ってゐる事である。

同書には、石井方式漢字教育による障害児教育を実践してゐる「創英教育研究所」（佐藤友泰所長）の実践例が紹介されてゐるが、佐藤所長は、漢字教育の効果を次のやうに述べてゐる。

第一は「情緒の安定が得られる」こと。第二は「言葉の定着が早い」こと。第三は「言葉の発達に伴ふ人間性の充実」。第四は「集中力がつく」こと。第五は「知能が向上する」こと。第六は「発語指導に適してゐる」こと。第七は「子供が意欲的になる」こと。……とあるが、漢字教育にはこのやうな効果があるのである。

さて、以上述べて来たやうに、零歳児の赤ちゃん、チンパンジー、障害児の言葉の教育を通して考へると、「視覚言語の方が聴覚言語よりも覚え易い」こと、「漢字の方が言葉よりも覚え易い」ことは疑ふ余地も無い。これは、まことに信じ難い事ではあるが、よくよく考へてみれば道理のあることである。

■漢字は幼児期のうちに

言葉の学習では、三歳から四歳までの一年間を“成熟期”と呼んでゐて、四歳になればおよそ二千語ほどの言葉を理解し、テニヲハを正しく使ひ、動詞などの活用も正しく使へるやうになる。

既に実証されてゐる通り、漢字は言葉よりも覚え易いものであるから、漢字の学

習においても、その“成熟期”は三歳〜四歳よりも遅いわけが無い。だから、四歳までには、日常よく使はれる漢字が二千字位、誰でも読めるやうにする事が出来るはずである。

私は、昭和三十五年から六年間、一年生を卒業するまで担任してみて、一・二年生が漢字を覚える能力が最も高く、五・六年生が最も低いことを発見した。明治以来、学校教育で漢字学習がうまく行かないのは、「能力が高い低学年で漢字学習を軽くしてゐて、能力が衰へて来た高学年で多くの漢字を学習させる」ことに在ったのである。

この事が、固定観念に縛られてゐる人々にはどうしても理解できないもののやうである。漢字は、幼児期が最も覚え易く、次いで小学校の一・二年生がよく覚えるのに、この時期に学習させないでゐて、記憶力が衰へてから多くの漢字を学習させるので、子供たちには漢字が難しく感じられるのであって、漢字そのものが難しいものでない事は既に述べた通りである。

食べ物がうまいかまづいかは、見ただけでは決して判らない。然し、口に入れてみれば直に判る。それと同じやうに、幼児に漢字が易しく覚えられるか否かは、いくら考へてみたところで判る事ではない。然し、幼児に漢字を教へてみれば直に判る事である。

私が体験から「幼児に漢字を教へるべきである」ことを主張し始めて既に二十年を経てゐる。「偏されたつもりでやってみたらどうか。やってみれば直に判るから、私の言った通りにならなかったらそこで止めれば良いではないか」と言って奨めて来たが、なかなか試してみようといふ者は少ないものである。全国には、幼稚園、保育園が五万もあると言ふのに、漢字教育を実践してくれてゐる幼稚園・保育園は五百園しか無い。

百園申一園しか無いのである。

■真実に目を覆ふことなかれ

教育者にとっては、昔のままの教育を続けてゐる方が楽であるに決ってゐる。だから、真実に目を覆って見ようともしないのである。然し、それでは子供たちが可哀さうではないか。誰だって、もっと高い知能の持ち主に容易になれ、本だってすらすらと読めて楽しく学習できるといふのに、幼児期に漢字教育をしないため、多くの子供たちが学校で本が読めないで困ってゐるのである。

「教科書が読めない」といふ事のために、すべての学習が苦痛に感じられ、それで学校嫌ひになり、その果てに非行に走った、といふ子供たちが何と多くゐることか。彼らの多くが、初めから好んで非行に走ったわけでは無いことは言ふまでも無い。いくら努力しても教科書が読めないのでは、学校に行くことが辛いのである。読めない教科書を前に半日坐ってゐることは拷問にも劣らない苦痛であらう。その苦痛から逸れようとして登校拒否をするのは当り前である。

私はさう思ふので、「教科書を読むだけの能力の無い子供に、親や教師が学習を強制してゐる事が、子供たちを非行に走らせてゐる最大の原因の一つである。だから、学校教育において、先づ教科書を読むことが出来る能力をつけてやる事が何より大切である」ことの認識をぜひ有ってほしいと思ふ。

然し、漢字を最もよく覚える時期である幼児期を無為に過したのでは、学校でどんなに良い教育が行はれたところで、教科書がすらすらと読めるやうになれるのは半数であって、あとの半数は落ちこぼれるのである。その事を考へたら、幼児教育に携は

る者は「漢字教育は幼児教育の範囲ではない」と手を拱いてはゐられないはずである。

わが国の大脳生理学を開拓された今は亡き時実利彦先生が「石井先生の幼児期の漢字教育についてとやかく言ふ者が多いが、私は今直に始めるべきだと思ってゐます。言葉と文字を早く身につければ、将来どんな方向にだって伸びられますからね」と仰しゃった言葉は、今でも私には忘れることが出来ない。

然し、世の教育者、教育学者たちは、時実先生の警告を無視し、大脳生理学を無視して誤った教育を改めようともしないでゐる。彼らは真実を故意に見まいとしてゐるのである。真実を知ることが恐しいのである。自分が今まで行って来た教育が誤ってゐた、とは思ひたくないからである。

私は、ここで某幼稚園長の告白を思ひ出さずにはゐられない。「石井方式漢字教育を初めて耳にした時には『そんな馬鹿な事があるはずはない』と思ってそのまま追究しないで過した。その後、講演を聴いたが、その時には、時々耳を覆ひたくなった。それでも、ためらひながら石井先生の著書を読まずにはゐられなかった。その時にも、途中で、本を閉ぢて読むのを止めようと思った事が何度あったか知れない。それほど真実を知ることが恐しかった」と。

「今まで何十年といふ長い年月、子供のために役立つ良い教育と信じて行って来たものが、その根抵から間違ってゐた」などといふ事は、確かに聞くに耐へない事である。まして、それがはっきりと間違ってゐる証拠を突きつけられ、誤りであることを思ひ知らされたら、誰でも愕然とすると同時に、たまらないほどの空しさを覚えるに違ひない。だから、某園長の「耳を覆ひたくなった」といふ気持が私にもよく解る。然し、幼児たちの将来を思って、矛盾する気持を克服し、真実の道を選んだ事に対して、私は敬意を表せずにはゐられない。

と同時に、世の教育者、教育学者たちに、「真実に対して目を覆ふなかれ」と声を大にして言ひたい。道を半ば歩んでしまってから真実を知ることは確かに辛い事であらう。苦しい事はよく解るが、真実に目を覆ふ行為に同情することは出来ない。そのままに過ぎたら、子供たちを不幸に陥れることになるからである。どんなに辛くあらうとも、真実から目を背けてはならないのである。

■ひとりでに覚える

幼児の漢字教育に反対する人は、必ず「幼児には、知的な教育よりも、情操教育や社会性を養ふ教育の方が大切である」と言ふ。「漢字教育をすれば、情操教育や社会性を養ふ教育が出来ない」とでも思ってゐるらしい。実に思考が単純で浅い。実は、漢字教育を行へば、情操教育も社会性を養ふ教育もうまく行くのである。

そもそも、幼児の漢字教育は、「漢字を教へることを目的とする」ものではない。「漢字で教へる」教育なのである。情操教育の時間をへらして漢字教育をするわけではない。「情操教育を漢字でせよ」といふのである。さうすれば、幼児は先生の話を耳で聴くと同時に、漢字をも目で視るから、大切な内容を耳と目とから同時に頭の中に入れることが出来るので、学習効果が著しく良くなるからである。

例へば、こんな話がある。足立区梅島幼稚園の山下宏一先生は、毎年、立冬の日には“立冬”のお話を園児たちにしてゐたさうであるが、その翌日、子供たちに質問してみると、“立冬”といふ言葉を覚えてゐる子供はいつも一人もゐなかったといふ。ところが、“立冬”といふ漢字カードを使ってお話をした翌日は、どの子も“立冬”といふ言葉もその意味も覚えてゐて答へられたといふのである。

アメリカの学者の実験報告によると、耳で聴いただけの記憶は、三日後には一〇パーセントしか頭に残らないが、それを耳で聴くのと同時に目で文字として視た場合には六五パーセントも記憶に留まる、と言ふ。だから、耳で聴いただけでは記憶に留らない事でも、文字として目で視ると記憶に留まり易くなるのである。

さういふ訳で、情操教育でも社会性を養ふ教育でも、その他どんな教育でも、耳に訴へるだけの今の教育では、幼児の記憶に留まるものが少なくて効果に乏しいが、これを漢字で書いて幼児の目に訴へながらお話をしてやれば、よく記憶に留まるので、どんな教育でも効果が著しいのである。

このやうに「漢字で教へる」教育をしてゐると、その結果として幼児は「ひとりでに漢字を覚える」けれども、それは幼児が漢字を覚えようと思って覚えたものではない。予期しない自然の結果なのである。幼児は、「覚えようと思はないのにひとりでに覚えられる」といふ特殊な能力を有ってゐるので、指導に当る者は「漢字を教へよう」と努力する必要がない、といふよりもむしろ「教へよう」と思はない方が良いのである。

この事は、漢字を軽視してさう言ふのではない。それどころか、漢字はどんなに尊重しても尊重し過ぎることは無い、とさへ私は思ってゐる。それにも関はらず、「漢字を教へよう」と思ってはいけないと言ふ理由は、漢字の学習は、言葉の学習と同じやうに、「ひとりでに覚える」ことが非常に重要だと思ふからである。

ひとりでに覚えたものは、大よそ忘れにくいものである。一生涯の記憶になるものが多い。これに反して、覚えようと努力して覚えたものは、大抵、目的があっての事であるから、その目的が果されると、忘れるのが普通である。だから、今の学校教育のやうに、漢字を覚えることを目的とする学習では、テストが済めば忘れてしまふので、本当の役には立たないのである。

幼児は言葉を“ひとりでに”覚えるのである。それでみて、四段活用でも上一段活用でも、カ行変格活用でも皆、必ず正しく使へるやうになる。幼児はそれだけの能力を、皆備へてゐるのである。その幼児が、言葉よりもずっと覚え易い漢字が、ひとりでに覚えられない訳が無いではないか。

それに、自分から進んでやりたいと思ってゐる事でも、他人から「やりなさい」と言はれると、途端にやる気が無くなってしまふ、といふのが人間の自然の情である。幼児期の幼児は、皆好奇心が強く、とりわけ漢字に関心を有つのが自然の姿であるから、それに任せてゐれば良いのであって、決して、「漢字を覚えなさい」と言ってはならないのである。

■漢字で教へる

学習心理学で、「ひとりでに覚えたものは忘れ難いが、覚えようと努力して覚えた事は忘れ易い」と言はれてゐるが、人間の頭は、自然とそのやうに働くやうに作られてゐるらしい。世界的な数学者として有名な、故・岡潔先生は、学生時代、試験の前夜に一度本を読めばそれで覚えられ、試験でいつも満点が取れたさうである。その代り、答案を書き終へて教室を出る時には、それが頭からどんどん消えて行くのが自分でも感じられた、といふ事を仰しゃってゐる。

かういふ頭の働き方をする頭が、本当に良い頭といふものであらう。「覚えるのも早いが、用を果したあとは忘れるのも早い」……これが本当の頭の働き方なのだと私は思ふ。だから、覚えるのに時間がかかる頭、何度も何度も読み返さないと覚えられない

頭、その代り、一旦覚えたあとは、それを覚えて置く必要が無くなっても覚えてゐる頭、かういふ頭が「働きの悪い頭」なのであらう。

そもそも何かを「覚えよう」と思ふからには、それを覚える目的があるはずである。だから、その目的が果されれば、もうそれを覚えて置く必要は無くなる。さうなったら、忘れてしまった方が良い訳で、それで、「覚えようと努力して覚えた事は忘れ易い」のだと思はれる。

さう考へたら、一生涯覚えて置く必要のある漢字は、テストを課して覚えさせるやうな事をすべきではない、といふ事が解るであらう。書取りテストのために覚えた漢字は、テストが済めば忘れてしまふのが自然の成り行きである。今の学校教育における漢字の学習は、「忘れるために努力して覚える」学習であると言へよう。

幸ひに、幼児は、特に強要しない限り、言葉でも漢字でも「覚えようと努力して覚える」事は決してしない。少しも努力しないでゐて、ひとりでに覚えられてしまふのである。時実先生が仰しゃるやうに「一生のうちで最も記憶力の強烈な時期」だからである。

かういふ理由があって、私は、「幼児に漢字を教へようと思ってはいけない」と言ふのである。幼児の周囲で、私たちが努力して多くの漢字を使ってゐさへすれば、幼児はそれらの漢字をひとりでに覚えてしまふものである。言葉をひとりでに覚える幼児が、それよりも覚え易い漢字を覚えない訳が無いではないか。

この「幼児の周囲で私たちが努力して多くの漢字を使って行ふ教育」のことを、私は、「漢字で教へる」教育と名付けてゐる。この教育を受ける幼児たちは、決して「漢字を覚えよう」と思ふことも無く、さういふ努力をすることも無く、ひとりでに漢字を覚え、覚えた漢字を忘れないだらうと思ふ。そして、何よりも漢字が好きな子供になっ

てくれて、決して漢字嫌ひにはならないことを確信する。

（三）小学校における国語教育

■最初から漢字で

「ひとりでに覚えた」漢字は、「ひとりでに使へるやうになる」といふ特徴を有つ。実は、「ひとりでに使へるやうになる」からこそ一生涯忘れることが無いのであって、いくらひとりでに覚えたものでも、その後使ふ機会が無かったら忘れてしまふに決ってゐる。ただ、ひとりでに覚えたものは、ひとりでに使ふものだから、使ふことによってその記憶が保持されるのである。

今の学校教育では、「テストすれば書ける漢字が、作文やノートには少しも使はれない」といふ事をよく先生方から聞く。「書けと言はれた時には立派に書けるのに、さうでない場合には“かな書き”して、漢字で書かない」のである。その理由は一体どこにあるのであらうか。

それは「覚えようと努力して覚えた漢字だから」である。私たちが努力して覚えた英語は、考へなければ口から出て来ないやうに、努力して覚えた漢字は、特に「書かう」と意識しなければ書けないのである。それで、作文やノートには、書けば書ける漢字を使はないで、初めから使ひなれてゐる“かな”で書くのである。漢字を使へば漢字を使ふ能力が発達するけれども、このやうに使はないでゐると、折角覚えた漢字も忘れられてしまふ。これが、今の学校における漢字教育が成功しない理由である。

かういふ失敗を無くすためには、幼児期に初めから漢字を目に触れさせることが

是非必要である。そのためには“がっこう”といふやうな、この社会に実際に使はれない表記を教へることを即刻廃止することが必要である。初めから“学校”といふ本物で教へて置きさへすれば、子供は決して“がっこう”などとかな書きすることは無い。初めに“がっこう”と教へるから、“学校”を習った後でも初めに習った“がっこう”がひとりでに出て来るのである。そのため、漢字がなかなか身につかない、といふ事は先に述べた通りである。

初めから本物で“学校”と教へて置けば、何も問題は起らないのである。その事は、私が昭和二十八年から三年間にわたる実践指導で既に証明済みである。世に“石井方式”といふ言葉が使はれるやうになって久しいが、石井方式とは、「初めから“学校”といふやうに本物の表記を用ひ、“がっこう”といふにせ表記は絶対に用ひないこと」を主張したものである。

昭和四十一年三月四日の朝日新聞は、社説に「石井方式を考へる」といふ論文を掲げ、「最初から本物の表記を教へる石井方式を考へてみる必要があるのではないか」と、広く世に問ひ掛けてくれたものであったが、それに応ずる声は遂に起らなかった。

明治以来、学校教育では、総て「かなを学び終へてから漢字へ」といふ方針が金科玉条とされてゐて、国民全体がその教育を受けて育って来たものであるから、皆その弊害を受けてゐるのにも関はらず、その弊害に気が付かないのである。だから、私がいくらその弊害を説明しても理解できないのである。

また、稀にその弊害に気が付いた人がゐたとしても、教育の世界は、旧を守ってゐればそれで済む所である。いや、済むといふよりも、旧を守ってゐた方が平穏無事な世界なのである。だから、教育界は、教育者だけに任せてゐたら、改革は永遠に出来ないだらうと私は思ふ。

「赤信号、皆で渡れば恐くない」といふのは、日本人の一般的な傾向であるが、教育界はとりわけその傾向が著しい世界である。だから、「青信号になってゐても、決して一人では渡らうとしない」といふのが、わが国の教育界においては常識のやうに思はれる。

実に実に残念な事であるが、ここが教育界と科学や実業の世界との違ふ所である。教育は、科学や実業のやうには結果が直に現れない。また、現れても、その原因が複雑に絡み合ってゐるので、判断が極めて難しい。だから、結果が悪くても、責任をいくらでもよそに転嫁できる。それが一層教育界の保守性を強めてゐる原因であって、それで私は「改革は永遠に出来ない」と思ふわけである。

だから、「真の教育改革は、大衆がその必要を痛感しない限り、出来ないであらう」と私は考へてゐる。と言っても大した事をする必要はない。人々が皆、「王様は裸かだ」と思ったら、誰に気兼ねなく「王様は裸かだ」といふやうに、教育問題についても、感じたままを率直に、声を大にして言へばよいのである。

“がっこう”は偽物（にせもの）だ。子供には偽物を教へないで、本物の“学校”を教へよ」と、人々が口をそろへて言ってくれたら今の学校教育も簡単に改まるものと私は確信してゐる。私はいつその日が来るか、旱天に慈雨を求めるやうな気持で切に待ち望むものである。

■読み書き分離の論

学校教育では、明治以来、文字の読み書き学習を同時に並行して進めて来た。然し、読みと書きとは、本来、並行して学習させるべきものではない、と私は考へてゐる。

「読みの学習から進めて、その文字についての認識が深まったところで、書きの学習に移る」といふのが、私の考へである。

私は、昭和二十八年以降、十全年間に亙って「読み書き分離、読み方先習」の教育を実践してみた。その結果を、「読み書き同時並行」の教育と比較してみると、その数分の一の時間の学習で立派に〝書く〟ことが出来るやうになることが判ったのである。字形の認識がまだ出来ないうちから書かせる今の教育法では、時間ばかりかかり、しかも一向に書けるやうにならない。その事はよく考へてみれば当然の事だと思ふ。

昭和四十四年三月十日の国語審議会で、今は亡き阿部吉雄委員(当時、東大名誉教授、文学博士)が、「幼稚園で、石井方式による漢字を読む教育が行はれてゐるが、漢字は読むことに価値が高い。書くことは後回しにして、先づ読むことから始める教育を考へてみてはどうか」といふ提案をしたところ、「読み書き同時の並行教育は明治以来の鉄則である」といふ反論が出、それについての是非をめぐる激烈な論争があった、と当時の全国紙で一斉に報じたことがあった。

朝日新聞は、これに基いて、四月二十二日、「漢字教育どちらが有効」といふ論争を特集した。「社会で漢字で書いてゐる言葉は、最初から漢字で教へよ。子供には、漢字を読むことはそんなに苦にはならないのだ」といふ石井方式の紹介から始まって、現行の読み書き同時並行論を主張する西尾実委員(元・国立国語研究所所長、文学博士)と、読み書き分離、読み方先習論に賛成する大野晋委員(学習院大学教授・文学博士)の二人の論文が掲載された。

読み書き並行の教育方式は、わが国の最初の文部大臣、森有礼がその方針を定めたものであり、以来百余年に亙りわが国語教育の基本とされて、全く批判されることかく今日に及んでゐるものである。然しながら、西尾論文を読むと、この論は実践

から生れたものではなくて、単なる思ひつきに過ぎない論である事が解る。西尾論の一部をここに紹介したい。（原文は現代かなづかひ）

読み書き並行論（西尾実委員）

去る三月十日の国語審議会総会の席上、漢字学習の方法につき、これまで小学校低学年で学習させてゐたやうに、読み書き並行で学習させるよりも、読みだけ学習させることにすると、これまでよりもずっと早く、たくさん修得させることが出来るといふ事から、漢字学習の方法を、読みだけに限って、漢字を早く数多く修得させるやうな調査を行ふべきだといふ提案があった。

確かに、近年小学校の児童たちは、入学前に幼稚園や家庭で、文字をたくさん覚えて来る者が多くなってゐる。テレビなどで漢字のいくつかを覚えて来る者もある。勿論、ただ読むだけでも、漢字を多く覚えてゐるといふ事は結構である。然し、どういふ字をどれだけ覚えて来るかといふ事になると、個人差が著しく、修得量もまちまちである。小学校低学年における言葉の学習は、さういふ偶然的個人的な知識だけに満足し、それを推進するだけでは足りない。

漢字が読めるだけでなく、書くことも出来るといふやうな学習を基礎にしなくては、漢字の一字一字を確実に認識することも出来なければ、その漢字の機能を生かすことも出来ない。いはゆる形・音・義の統一体としての漢字を学習させるためには、面倒なやうでも読み書き並行の基礎的学習を経験させなくてはならない。

漢字の学習を読み書き並行に進めなくてはならないと言っても、それは小学校における入門期における学習の事で、入学以前に個人的偶然的に漢字を修得してはなら

ないといふ事ではない。また、入門期の読み書き並行の基礎学習が終った後には、当然読む学習だけで、読み書き並行学習によって得られるやうな形・音・義の続一体としての漢字が修得されることも認めなくてはならないし、むしろ、それを奨励しなくてはならない事は言ふまでもない。このやうに漢字学習は、読みだけで修得される方法と、読み書き並行の学習とは、決して対立的でなく、むしろ共同的相互補正的方法であることを理解しなくてはならない。（石井注：これが今まで行はれてゐたら誠に結構な事である。然し、実際には「読み先習」の考へ方を全く認めてゐなかったからこの議論が始まったのである。そもそも「読み先習」は「読み書き並行」を全く否定するものではないのである。“山”や“川”などは読み書き並行でよいのである。然し、“鳥”や“獣”などは並行学習よりも読み先習の方が効率がよいから、「読み先習“も”認めなさい」といふ事なのである）

小学校における漢字学習が、読みによって促進される事と、これまでのやうな読み書き並行学習とは、当然、共同的に適当に学習され指導されなくてはならないが、国語学習において、特に漢字学習は大事であり、かつ、難しいために、漢字の学習をかなの学習から切離して、出来るだけ漢字数や漢語数を早く多く学習させて、漢字漢語のストックを多く持たせる事が学力であるといふやうに決め込んでしまふ事には疑問がある。（石井注：これこそ現行の読み書き並行の教育が陥ってゐる弊害であり、読み先習はそれを救ふために考へ出された方法なのである。次の“書取り”なども読み書き並行だから起る事なのであって、読み先習ではさういふ必要が無い。全く見当違ひの批判といふより仕方が無い）

これまでも、漢字は書くことが難しいといふ立場から、書取りといふ学習法が盛んに行はれた。さうして、漢字漢語に関するストックを豊富にしようとした。勿論、さ

ういふストックが豊富であることは貧弱に勝ること万々である。然し、さういふ書取り練習を行っても、案外、作文力に対する影響が少ない、といふ事も注目されて来た。

これは書く漢字の問題であるが、読む漢字漢語のストックにも、これに似た現象がありはしないかと考へられるが、どうであらうか。（ここに至って西尾氏は“読み先習”の言葉だけしか知らなくて、内容については全く無知であることが解る）（中略）

近年、小学校入学の児童に対し、教科書中のかな言葉を漢字に直して読ませる方法が行はれてゐるといふ。また、先生が話をしながら、実物の代りに漢語の文字板を提示し、読みによる漢字を修得させることが行はれてゐるといふ。

私はまだ見学してゐないから、かれこれ批判することは出来ないけれども、これは日本語を表記するための正書法が一定してゐれば、それは有力な方法に違ひない。が、現在のやうに、かなでも書き漢字でも書くといふやうな習慣になってゐる場合には、漢字を知らなくてもかなでなら書けるといふ段階を経ないで漢字を教へることに急ぎ過ぎると、却てセンテンスにおける漢字使用の的確さが失はれることもありはしないかと思はれるが、どうであらうか。（以下略）

西尾氏の論文の主要な部分をここに紹介したが、お読み頂けば直に解るやうに、石井方式についての理解が全く無い。いや、理解が無いならまだ良い。大変な誤解といふか、自分勝手な想像で石井方式を決めつけてゐる。然し、これは西尾氏に限った事ではない。石井方式に対する批判は全部この手のものである、と言っても決して言ひ過ぎではない。

石井方式でないものを石井式だと勝手に思ひ込んでそれで非難するのだから馬鹿馬鹿し過ぎて議論する気になれない。だから、西尾氏の論について一々言ふのを差し

控へるが、終りのツメテンを付けた部分については一言して置くことにする。

この西尾氏の判断は全く逆である。「漢字使用の的確さが失はれる」のは、初め“かな書き”で教へるからであって、最初から漢字で教へればさういふ心配が全く無い。だから、“がっこう”を“学校”と教へよ」と提案したのである。

私は、昭和三十一年から二年間、「かな書きの段階を経て漢字を教へる」といふ、文部省指導要領に則った指導を行ひ、これを、二十八年から三年間実践した石井方式による指導の結果と比較してみて、漢字使用の的確さに余りにも違ひがあったので、敢て文部省の方式を否定し、石井方式の採用を提案したのである。

その事については『私の漢字教室』(黎明書房刊)といふ書物によって、昭和三十六年に発表し、教育界でもかなりの評判になったものであるから、西尾氏ほどの地位に在ったら、一読あって然るべきだと思ふが、それが無かったやうである。然し、読んでゐなくても、大新聞に論文として執筆するからには、批判する対象を理解してから筆を執る責任があるのではないか。

かういふ無責任極まる論文を書かれると、読者ばかりか、私にとっても甚だ迷惑である。西尾氏が考へてゐる石井方式が本当の石井方式だと思ひ込まれる恐れが多分にあるからである。「何だ。石井方式とはこんなものか」と思はれたら、石井方式を理解してもらふ道が切れてしまふ。然し、これは西尾氏に限らず、著名な学者にはよく見られる態度であるから御注意頂きたいと思ふ。

読み先習論(大野晋委員)

固定観念を打破れ――読む力こそ生活に必要――

私は先づこの議論が「教育の方法」上の議論であることをお断りして置きたい。然し、この背後には「文字の役割」に関する一つの見方が控へてゐて、戦後の文字政策についての一つの批判が込められてゐる。また、これは空疎な観念論ではなく、実践の結果を基礎としてゐることも最初に言って置きたい。

戦後の学生が、読み書きの能力において、著しく低い実力しか持ってゐないことは、既に繰返し言はれて来た。それは「定説」となってゐる。その状態は大学生において綜合的に示されてゐるが、その途中の小学校・中学校でも明確に見られる事実である。例へば、小・中学校の社会科、理科などの教科書が読めない結果、社会科、理科などの教師は、先づ教科書の読みのために多くの時間を費してゐる。

この状態をもたらした原因の一つには、漢字の学年配当たるものがある。小学一年生四六字、二年生一〇五字、三年生一八七字といふやうに、各学年で学習する漢字の数が限定され、それ以外の漢字を教科書に提出することは制限され、学習が拒否されてゐる。この漢字の配当表決定の基礎には、小学生の学習負担の軽減といふ歌ひ文句かあり、学ぶ漢字はすべて書けなければならないといふ考へ方がある。そして、小学生の卒業時に、書取りで書ける字数は五百字程度であるといふ戦前からの調査結果が参考にされてゐる。

然し、文字の機能について、我々は考へ直さなければならない点がありはしないか。と言ふのは、言語生活で果す文字の機能は、書く面と読む面があり、文字は現代の社会生活では、むしろ読む物として大きな役割を担ってゐる。一日の言語生活を顧みる時、新聞を読み、雑誌を読む。殆どの人々が現在、それに三十分から一時間をかけてゐるだらう。

然し、書く時間はどれほどあるかと見れば、職業的な文筆業者を除いた場合、個

人個人は、手紙、日記、記録その他に、平均して読む時間の十分の一程度の時間しか費してゐない事に気付くであらう。ペンを持たない日のいかに多い事か。また、たとへ毎日ペンを執るとしても、それは、ある特定の事項に関する繰返しが多い。それに反して、読む文字の範囲はいかに広いことか。

戦後の国語教育は、読むこと、書くことだけが国語の教育ではないとして、話すこと、聞くことを大きな項目として取入れた。それはそれとして結構な事であると言へる。然し、書くこと読むことに関しては、書ける文字と読める文字とを、初めから一致させようとした。そして、漢字は難しい文字だとして、なるべく学ばせまいとして来た。だから、先づカナを教へ、後にそれを漢字に翻字する。然し、こゝには誤った固定観念の支配かある。それを実験的に明示しだのが、石井勲氏による、いはゆる石井方式である。

石井方式は「社会で漢字で書く言葉は最初から漢字で与へよ。子供には、漢字を読むことはそんなに苦にはならないのだ」といふ立場に立つ。その事を、石井氏らは幼稚園児の教育で実践的に示したのである。井上文克氏以下の人々を中心とする大阪の幼稚園で、二万人近くの園児がこの教育に加はってゐる。いたいけな三歳児たちが、先生の示す木札に書かれた「電車」「飛行機」「自転車」「自動車」「汽船」といふ文字を一斉に“デンシャー”“ヒコーキー”“ジテンシャー”と読むのを見た人々は、己が目を疑ふであらう。

また、「九」と「鳥」と「鳩」のうち、園児が最も確実に早く読めるやうになるのは「鳩」といふ文字であり、「九」がこの中では最も読める率の低い文字である事を聞いて、人々は意外の感に打たれざるを得ないだらう。これらは、すべて実験の結果であり、一年保育の終りに、幼稚園児が読める字数は、四、五百字が標準となる事も明らかになっ

てゐる。

この教育は、「漢字を詰込む」ために行はれたものではない。一日に五分位しか漢字での教育には使はれてゐない。こゝでは、「漢字を教へる」よりもむしろ「漢字で教へる」ことが目標である。

漢字かな交り文といふ表記の体系は、余り漢字を減らしては成立しないものだ。その体系には、それなりにある程度の漢字の数が必要なのだ。それを組合せて表記の体系を作り、また単語を造語して行くものなのである。だから、なるべく早く、ある程度の、恐らく数百字から千字程度の文字が読めるやうになる方が良い。それによって、社会科も理科も文章が読めるやうになる。そして内容の理解へ直ちに入って行ける。

今は、小学校低学年から、社会科だの何だのと、各教科が時間を分取って使ってゐる。然し、教科書の読みの段階で苦労してゐる。そこで、社会科や理科は、小学校低学年の国語科へ、自分の持ち時間を貸してやる方がいい。子供が低学年で今よりも多くの読み時間を持ち、読みに力を注ぐなら、漢字が今よりずっと多く読めるやうになる。さうした上で、高学年で社会科、理科の持ち時間を返してもらへば、それぞれの学科は、早い豊かな理解と進歩を生徒に期待できるだらう。

大体、日本には、「漢文の素読」といふ学習の伝統があった。子供が漢字だけの文章を読むことを学習したのである。それによって文字を習得し、後にそれを書く段階へと進めて行った。戦後の漢字政策は、漢字を悪い文字と思ひ込ませ、なるべく学習させないやうにする事を目指してゐた。そして、漢字の学習が大きな負担だとして来た。然し、石井方式に基礎を置く「漢字の読み先習論」は、漢字学習に関する「読みと書取りの分離」を提唱し、豊富な識字の先行を求めるのである。

誤解を避けるために一言するが、これは決して漢字だけの教育を主張するもので

はない。話し方、聞き方の教育を否定するものでもない。漢字かな交り文を表記の正則とする限り、漢字の学習法は、常に基本から研究されるべきものである。「漢字の読み先習論」は、その一つの学習法として大きな意味を持つことを主張するに過ぎないものである。ただし、その背後には、戦後の文字政策の底にある考へ方に対して、批判的な思考を持ち、戦後の政策に対する単なる反対から脱却して、新しい有効な教育法を獲得しようとする一つの見解なのである。

以上が大野先生の論文である。今から二十年前に書かれたものであって、この二十年間には、読みと書きとの社会生活における比重は一層大きなものになって来てゐる。ワープロの著しい進歩と普及により、官庁や会社における文書は言ふまでもなく、個人的な手紙なども、今は文面だけでなく、表書きまで、活字で印刷するやうになり、漢字を手書きする機会はいよいよ減って来てゐる。極言すれば、「漢字は読めさへすれば、書けなくても済む」時代になったのである。「読み書き同時の並行学習」は、その意味でも考へ直すべき時代になってゐるのである。

■漢字だとよく解る

漢字で書ける言葉を全部漢字で書いたら、一年生にはとてもついて行けないだらう、と心配しがちであるが、実は漢字が多い文ほど解り易いのである。私が初めて小学校の一年生を担任した時、教科書に“さくぶん”といふ言葉が出て来たので、これを“作文”といふ漢字に直し、この言葉の意味を説明しようとしたところ、子供たちの方から、「先生。その字『作る文』って読めるね」「それ『文を作る』って事ぢゃあないの」と言ったもの

である。“さくぶん”に続いて出て来た“ぶんしゅう”といふ言葉も、“文集”と漢字に書き直すと、直に、『作文を集めたもの』と理解してしまった。“さくぶん”や“ぶんしゅう”のままだったら、説明してやってもなかなか理解してもらへなかったと思ふが、“作文”“文集”といふ漢字表記のお蔭で、説明せずに済み、子供たちもどんなうまい説明よりよく理解できたやうであった。

また、“どうぶつえん”といふ言葉が出て来て、“動物園”に書き直した時の事である。「先生。“動物”って『動く物』って読めるね」と言ったので、「さう。生き物には、桜の木やチューリップの花のやうに、動くことが出来ない物と、象さんや猿さんのやうに動くことが出来る物とあるんだよ。それで、動くことが出来る生き物は『動く物』と書いて“動物”と言ふことにしたんだよ」と教へてやった。すると、「ぢゃあ“金魚”も動物なんだね」「“蟻”さんも動物なのか」「先生。“人間”も動物なの？」と、子供たちから驚きの発言が続出したものである。

四・五年生になっても、“動物”といふ言葉は“獣”と同義語のやうに思ってゐる者が多く、“魚”や“虫”と並列の言葉だと思ってゐる者が多い。ところが、一年生でも、“動物”といふ表記で学習すると、このやうに“動物”が“魚”や“虫”の上位概念であることがちゃんと理解できるやうになる。だから、一年生にとっても、漢字の多い文章の方が解り易いのである。これは、私が一年生に試してみて初めて解った事であり、試してみなかったら決して解る事ではないと思ったものである。

■算数の文章題が出来ない理由

私が指導主事を務めてゐた頃、小学校の先生方から聞いた最大の悩みの一つに、「算数の文章題」があった。「問題の文章を読んで式を立てることが出来ない」といふのである。計算は出来るのだが、式を立てることが出来ない子供が多いのである。

ところが、昭和二十八年、私が一年生を指導してみると、子供たちは「計算問題よりも文章題の方が面白い」といふのである。事実、計算問題よりも文章題の方が正答率が良いのである。だから、指導主事時代に先生方から聞いた悩みは、一部のもので、それも誇張されたものだったのかと思った程である。然し、これは、私が漢字を多く使った文章題を出してゐたからであったといふ事が、昭和三十一年から文部省方式で一年生を指導してみて解った。

つまり、「かな書きの文章題」では、全く式の立てられない子供が多いのである。そこで、かなばかりで書かれた文章は、文意を汲み取るのが大変に難しく、そのため、国語で読解指導をする必要があるのだといふ事を、理解することが出来た。ちゃんとした「漢字かな混り文」なら、読めば即座に理解できるのが普通であって、殊更“読解指導”などする必要が無いのである。いや、読解指導など無い方が良いのである。

数年前、「人間形成と国語教育」といふテーマで四人の先生方と座談会をした時、東京学芸大学国語教育学会の饗場一雄先生がこんな事を発言してゐた。「ある学校で、全校を読解指導を重視する“精読組”と、多読を重視する“多読組”とに分けて指導したところ、国語学力テストの結果は、語彙力も読書力においても多読組の方がずっと良い、といふ結果が出た」と。

私もその時、即座に賛意を表し、「読解指導などどんなにうまくした所で、子供に

は退屈でしかない。時間の浪費である。子供は、説明してもらはなくても、それぞれの能力に応じて何かを吸収する。立派な作品を多く与へることだ」と述べた。然し、それは「かなばかりで書かれた文章」ではなくて、ちゃんとした「漢字かな混り文」として与へなければいけないことは言ふまでも無い。

■国語教育は“読み”が中心

戦後の国語教育、最大の誤りは「従来の読み方中心の教育を“話す”“聞く”“読む”“書く”といふ四本柱に改めたこと」であると思ふ。これはアメリカ教育の全くの模倣である。多民族国家のアメリカでは、英語を話し聞く能力に欠けてゐる者が多い。だから、アメリカでは大いに“話す”“聞く”能力を養ふことを重視する必要があるのである。

然し、日本では、入学する前から、自分の言ひたい事を話し、先生の言ふ事を十分に聞き取る能力を身に着けてゐる。それ以上の“話す”“聞く”能力を養ふのには、“話す”“聞く”学習よりも、むしろ“読む”学習の方が有効なのである。それは、“読む”学習によって語彙が豊かになり、理解力が深まることが、“話す”“聞く”能力を育てるのに大層役立つからである。だから、戦前は、国語の教科書は“読本”と言ひ、国語の学習時間は“読み方”の時間と言って、国語は“読み”の学習が中心だったのである。

敗戦によりアメリカの真似をしたのであるが、“読み方”が軽んぜられた結果、小学校の教材から“文語文”が無くなった。「難しい言葉を出来るだけ易しく」といふのがその言ひ分である。確かに私たち大人は難しい言葉には弱い。一続きの文の中に解らない言葉が一つあっただけでも、読んでゐていやな気持になる。然し、子供にはそれが

通常の状態なのである。だから、解らない言葉にぶつかっても、私たちのやうにはいやな気分にはならない。いや、それどころか、さういふものを喜んで求めてゐるやうに私には思はれる。それで、新しい語彙がどんどん身に着くのだと思ふ。

■古典教育の奨め

長い間小学校で愛唱されて来た歌「我は海の子」が、難しい言葉が多いといふ理由で削除されてしまったと聞いた。以前にも、「春の小川」の歌詞がやはり難しいといふ理由で、「さらさら流る」が「さらさら行くよ」に改められた事があった。その時にも、私は、「小川はさらさら行く」とは何といふ表現かと、腹立たしい思ひで一杯だった。

既に述べたやうに、難しい言葉を嫌ふのは成長の止まった大人だけであって、子供たちにはそれに触れるのが楽しいのである。子供たちは未知の言葉に触れて成長するのであって、知ってゐる言葉だけに接してゐたら進歩は無くなってしまふ。とんでもない思ひやりである。

昔の学者、近くは吉田松陰、橋本左内といふやうな人は、三・四歳の頃から古典を読み、十歳ともなれば、私たちを感動させるやうな詩文を作ってゐる。然しながら、人々はこれを生れつきの天才だと言って、その一言でこれを片づけてしまってゐる。確かに、長い間、知能は生れつきであって、生後の教育でこれを変へる事は出来ない、と考へられて来た。ところが、大脳生理学などの諸科学が著しく進歩して、知能は幼児期の頭脳への刺戟によって作られるものである、と考へるやうに変ったのである。

そこで、私は、昔の学者や松陰は、生れつき頭が良かったから三・四歳で古典が読めたのではなくて、三・四歳といふ幼児期に古典を読んだので頭が良くなったのではない

か、と考へ、私の研究所（八王子市めじろ台、石井教育研究所）に来てゐる三・四歳の幼児に漢文の『孝経（かうきやう）』を教へてみる事にした。

この子供たちは、一週間に一日、それも僅か五十分間の学習時間しか与へられてゐないので、『孝経』を学習する時間は二十分位しか無い。だから、一回の学習は凡そ一ページ位のものである。文意を簡単に説明して聞かせ、その後一節づつ私が読んだ所を子供たちに復唱させる、と言った指導をする。

子供たちがどんな反応を示すか、その結果は甚だ心配であったが、子供たちの反応は意外な位良かった。次の週に、子供たちに学習した所を読んでもらふと、どの子もすらすらと読むのである。

あとで親たちに聞いてみると、毎朝、子供たちは起きると直に『孝経』の本を取り出して来て、大きな声で朗々と読むのださうである。

母親にも父親にも読めない本が読める、といふ事で親たちが心から驚嘆する。それが子供たちにとっては何よりも嬉しいらしくて、繰返し繰返し読むらしい。そんな事で、『孝経』以外の学習を含めて一週間に僅か五十分の学習であったが、十か月もすると『孝経』全巻を読み終へてしまひ、巻頭から巻末まで、どこを読ませてみてもすらすらと読めるやうになってしまった。専門課程の大学生でもかうは読めるやうには先づならない。

私の研究所では、決して良い子ばかりを選んで教へてゐるのではない。どちらかと言ふと、頭の働きが普通より鈍い子供もゐる。それでも立派に『孝経』が読めるやうになったのである。この試みにより、「松陰でなくても、三・四歳になれば、『論語』や『孝経』が読める」といふ事が証明されたわけである。

『孝経』を終へると、次には『論語』をやることにした。『論語』は、『孝経』に比べると短

かくまとまってゐるのでやり易い。私の指導は、“素読”ではなくて“講読”である。どこまで解るか、私にも全く解らないけれど、とに角、字句の解説から全文の意味内容に至るまで、大学で大学生に対する時と同じやうにやってみたのである。

私が、こんな指導をしてゐると言ふと、「幼児に『論語』が解るわけが無い。無駄な労だ」といふ意見がよく返って来る。では「いつになったら理解できるか」と私は反問する。谷川徹三先生の御本に「一高で安井先生（伝来の大儒、息軒先生の孫、小太郎先生）の『論語』を拝聴して初めて『論語』の素晴しさに感動したが、その後十数年して『論語』を読んでみると、解ってゐたつもりが真の理解ではなかった事を知った。それからまた数十年経った今、『論語』を読んでみると、またまた前の理解が真の理解ではなかった事を思ひ知らされる」といふ意味の事が書かれてあったと記憶してゐる。

『論語』とは、このやうに人間の成長につれて理解が深まって行く書物である。二十歳の時には二十歳なりの理解があり、四十歳の時には四十歳なりの理解があり、六十歳になれば六十歳なりの理解があるやうに、幼児には幼児なりの理解があって然るべきものだと私は考へてゐる。また、山本七平氏が、「『論語』が本当に理解できるのは四十歳を過きてからであらう。だから、解らない事が覚えられる幼児期に学ばせるのが良い」といふ意味の事を何かに書かれてゐたが、全くその通りだと私は思ふ。

然し、先に「幼児には幼児なりの理解がある」と言ったけれども、今、『論語』を学習させてゐる幼稚園の園長さんから次のやうな話を聞いた。ある母親が子供を連れて電車に乗り、友達の婦人と大声で談笑してゐると、子供が母親の袖を引いて、「車に升りては正しく立ちて綏を取る。車中にては内顧せず、疾言せず」と言ったさうである。母親には何の事だかさっぱり解らない。そこで子供に尋ねたところ、これは『論語』にある言葉で、車に乗った時にはわき見をしたりおしゃべりしたりしないやうにしなさい

といふ事だ、と母親に説明したと言ふ。母親は恥かしいやら嬉しいやら、複雑な気持だったが、この事を園長に報告して感謝したといふ話である。

この話を聞けば、『論語』にも幼児に立派に理解できるものがあることが解る。「車に乗ったらわき見したりおしゃべりするな」といふよりも、「車に升りては内顧せず疾言せず」と教へた方が、心の奥深く滲み入って、実践につながるもののやうである。然し、幼児期や小学校における古典教育は、山本氏が言はれるやうに、四十歳を過ぎて役に立てば良いといふつもりで行った方がよいと思ふ。

■低学年における漢字の覚えさせ方

記憶の仕方には、機械的記銘法と論理的記銘法との二つがある。前者はいはゆる“丸暗記”といふもので、普通には、「がむしゃらな反復練習」によるものが多い。

ところが、幼児期は丸暗記が最も得意な時期であって、反復練習などしなくても、たいていの事が覚えられる。それも、「覚えよう」といふ努力なしに、ひとりでに覚えられるものだから、何の負担もかからない。それで、私は、幼児期の学習を「無努力・無負担の学習」と呼んでゐるわけである。

小学校の一・二年生は、このやうな幼児期の特性をもってゐて、丸暗記にすぐれた能力を発揮することが出来る。だから、この時期には、「漢字で表記できる言葉は、すべて漢字で表記して提出する」やうにすれば、ただそれだけの事で、年間に五、六百の漢字が楽々と覚えられるやうになる。

（これらの漢字の“書き”は、原則的に言へば、その漢字が教科書に新出された時に学習させればよい。“読み”と“書き”との間に時間的な隔たりがあればあるほど、書き

は容易に速成される。これが「読み書き分離」を主張する根拠である。新出で「読み書き同時」達成は土台無理なのである）

私がこの方法を推進するために、「漢字は学年配当表にとらはれた指導をしてゐてはだめだ」と主張したのは昭和三十年代であるが、その頃の文部省は、「配当表無視は指導要領違反であり、法令違反になる」と言って責めたが、今では、文部省の刊行図書に、「学年配当表にとらはれた指導をしていては、漢字学習の効果はあがらない」と書かれてゐる。これが本当なのである。

低学年の漢字指導では、「漢字で表記できる言葉はすべて漢字で表記して提示する」ことが、最も手軽に出来て、しかも最も有効な方法である。一千字の漢字を読めるやうにすることは容易で、それが出来たら、中・高学年の漢字学習は必ず成功しよう。

「字源的な方法による指導」は、中学年以降にはぜひとも必要な指導法であるが、この時期にはほとんど必要がない。簡単に丸暗記できる時期に、字源的な説明に時間を費すのは時間の浪費に近い。

■中学年以降における漢字の覚えさせ方

小学生も三年生になると、丸暗記する力が急速に衰へ、それに代って、論理的な記憶の仕方が得意になって来る。これは恐らく、知識が豊富に蓄積され、それが頭の中で自然に整理されることにより、論理的な思考力が発達するので、丸暗記する必要がなくなって衰へるのかと思ふ。どんな能力も、使はないでゐると衰へるものである。

さういふわけで、三年生以降は、漢字を丸暗記することが苦手になるので、漢字の

「機械的な反復練習」は、非常に効率の悪いものになってしまふ。そこで、「字源的な方法による指導」といふ“論理的記銘”に頼らざるを得ないのである。

字源による漢字指導の“主眼”は、漢字の有つおもしろさを十分に子供に理解させることにある。この事に成功したら、あとは子供が自分から進んで“解字”を試みようとするので、教師はもう何もしてやる必要はなくなることであらう。

「普通の教師はただ説明する。すぐれた教師は見事な説明をして子供を理解させる。しかし、本当の教師は、子供の心に火を着けてやる」ものである。

われわれは、とかく“すぐれた教師”にならうとのみ努めて、“本当の教師”になることの重要さに気づかない。然し、私は、教育とは「子供の心に火を着ける」ことだと思ふ。いくらうまい“解字”をしてみせても、それだけでは高が知れてゐるではないか。

では、どうしたら「子供の心に火を着ける」ことになるのであらうか。それは、たっぷりと時間をかけて、自分が最もすばらしいと思ふ得意な“解字”をして、漢字の魅力を心ゆくまで子供たちに説き明かすことだと思ふ。

この“解字”は、一字だけの解字であってはならないであらう。子供たちがすでに知っている漢字をたくさん網羅した共通の部首によって、“体系的(最後の所に例示したやうに)に、“論理的”に解明してみせることである。

さうすれば、それまで個々ばらばらだった漢字が、俄かに緊密か関係を作り始め、見事な体系となり、漢字が生き生きとしたものになる。このやうにして、漢字のもつ魅力を子供に味ははせることが出来れば、子供の心は漢字のとりこになるに違ひない。

もっとはっきり言べば、一度、漢字のもつ魅力を味はった子供は、自らその魅力を求めて自分の手でその秘密を解明したいと思ふに違ひない。その際に必要なのは、子供た

ちが自ら調べるのに必要、かつ適切な方法が用意されてゐることである。

ところが、今までそれが全く無かったと言ってよい。近頃は、解字のある字典が多くなったけれども、数人の学者が分担して解字してゐるので、解字に統一性がなく、そのため子供が迷はされてゐる。その上、全く意味の通じない解字や、学者の独りよがりの解字が少なくないので、解字に対する「子供の意欲の火」を消される恐れがある。

それで、私は、子供によく解る、楽しんで次々と読みたくなる解字辞典の作製を目指して、独りで一貫して解字に努め、このほどこれを三省堂から刊行した。『常用漢字学習辞典』と言ふ。

この辞典は、全く今までに無かった、新しい配列法を試みた。例へば、“字源”の“源”は、“原”が本字で、この字に“はら”といふ使ひ方が生じたため、“源”を作ったものである。だから、“源”でも“原”でも、これを調べるには二字共に調べる必要がある。それで、この辞典は“源”を“氵”の部から抜いて“原”の次に並べた。索引では“源”が“氵”の部にあるのは言ふまでもない。

だから、“鼻・帽・鑑”はそれぞれ“自・冒・監”の次に配置されてゐる。また、“亼”を設けて“会・合・令・今・僉・兪”を一つにまとめ、かつ、“合→答・塔・搭”“令→冷・零・命”“今→念・含・吟”“僉→検・倹・険・験”“兪→輸・論・愉・癒”といふ配列にし、容易に体系的な理解が出来るやうにした。

かういふ辞典だから、“冷”を調べるつもりが、自然と“令”に及び、“零”“命”に及んで、知らず識らず、知識が広く、深いものになると思ふ。最後に、「体系的・論理的解字」の“体系”なるものの具体例を一つだけ示す。

“口”を基にした字の体系

口　兄・号・啓・哲……（略）
　　呼・唱・叫・喚……（略）
古　故・固・個・枯・湖・克
舌　話・辞・乱
召　招・詔・紹・昭・照・沼・超
司　伺・詞・嗣
可　河・何・荷
奇　崎・寄・騎
呉　娯・誤・虞

台　怠・治・始
周　週・調・彫
喿　操・繰・燥・藻
言　警・誓・誉……（略）
　　計・談・許……（略）

“口”の字一つ取ってみても、これだけの広がりがあるのである。これが上下・左右に、網の目のやうにつながり合って“体系”を作ってゐるのである。従来の辞典ではこれが把握のしやうもなかったが、私の辞典では、このやうに“ひとつながり”につながってゐるので、一字の研究が自然と他の字の学習を誘ひ、容易に体系を形成させ、理解を深めることを確信する。